

# 伊吹敦氏の発表論文に対するコメント

李徳辰\* (韓国 昌原文星大学校)

1. 伊吹敦先生の「禅宗の成立と仏性観の変容」を読み、大変勉強になりました。論文の行間の処々に先生が努力された痕跡が窺えます。したがってコメントをすることは並大抵のことではありません。論文を書かれた労苦を考えると、コメントは極めて慎重にやらなければならないと思いますが、論文を読みながら学ぶという心で、何点か質問させていただきます。玉稿に傷がつくようなことがなければと思います(以下、敬称を省略し、伊吹敦教授を論者と、私を評者と称します)。

2. よく知られているように、達摩以前の中国禅は特定宗派の所有物ではなかった。これは、本論文でも一部見えるように、天台の慧思や智顛だけでなく、華嚴の杜順と智儼、そして密教の一行などまでも、禅師の範疇の中に入れていたのを見てわかる。そして6世紀以後、天台宗と達摩系統が、徐々に中国禅仏教の主流として浮かび上がるようになる。しかし、その後、達摩と慧能を経て中国禅宗が成立し、以後、中国禅の主流と位置づけられるようになる。この時、中国禅宗の成立に、天台宗がとても大きな影響を及ぼしたと見ることもできる。

論者にお尋ねする。禅宗の形成時期に、達摩系統とあわせて重要な位置を占めていた天台宗が、以後、禅宗にその席の大部分を譲った原因はどこにあったと見るのか？

同時に、中国天台宗が禅宗の形成に及ぼした主要な影響は何であったと考えるのか？

そして『法華経』という特定の経典は、禅宗の形成に、肯定的であったにせよ、否定的であったにせよ、どんな役割を果たしたと見るのか？

3. 『楞伽師資記』の慧可条を見ると、慧可は修因証果の漸修法を鼓吹している。

---

\* 이덕진 (イ・ドクチン)。昌原文星大学校教授。

これは『続高僧伝』の慧可の言葉とは一致しない。これは議論が様々に広がる可能性を示すものである。ところで論者は、慧可が悟りを、段階がないものであると考えていた可能性は高い？ と述べている。評者が見るところでは、これはとても「曖昧な表現」である。このように表現した理由は？ またそのように見た時、「考える可能性が高い根拠」はどこにあるのか？ 文献的な考証とあわせて精緻な論究をお願いする。

4. 論者は、「東山法門の歴史的意義は、全く新しい独自の修行生活を生みだし、「悟り」を大衆化した点に求めることができるが、これは従来の仏性観に対して大きな変更を強いるものでもあった。即ち、従来、「仏性」は、凡夫の立場から、「衆生が悟りうる根拠」、あるいは「衆生が持つ悟りうる能力」、即ち、慧遠のいう「能知性」と見るのが普通であったが、東山法門の成立によって、悟ったものの立場からする見方、即ち、万有の全てが「仏」に他ならないという「所知性」としての「仏性」が大きくクローズアップされるようになったのである。この「所知性」としての「仏性」を前面に打ち出したのが、初期禅宗の一派、牛頭宗である。……牛頭宗と荷沢宗の思想的な相違と対立を反映するものであることは間違いない。この対立を慧遠以来の思想的枠組みから理解するなら、牛頭宗が覚者の立場から「所知性」としての「仏性」を強調したのに対して、荷沢宗は、「覚」を求める衆生の立場から、あくまで「能知性」としての「仏性」に拘ったのだと言えよう。仏と同じ「悟り」を実現しうることを高らかに宣言したところに禅思想成立の史的意義を求めるのであれば、荷沢宗の主張に徹底しないものがあることは言を俟たない。その意味で荷沢宗がやがて衰退していったのも当然と言えよう」と述べている。

この文と併せて、仏性に対して論者が、神秀の「観心論」、『大乘無生方便論』、そして弘忍の『修心要論』などを通して東山法門について論究したのは、とても勉強になった。

ところで若干の疑問がある。まず第一に、論者が述べる、荷沢宗が能知性一辺の仏性を強調したという主張は、説明がほとんどないためでもあるが、その真意を把握するのが難しい。詳細な説明を文献的な資料とあわせてお願い申し上げる。

第二に、論者が、仏性と悟りについて論究しながら、「慧能」を排除した点は理解し難い。故意に排除したのであるか？ そうならば、その理由はどこにあるのか？ 慧能は仏性と何の関係もないのか？ 中国禅宗の成立と発展において、慧能は排除し

なければならないのか？ この点は以後、論述の過程で、慧能の南宗禅を除外したまま、東山法門を馬祖の祖師禅と直結させる問題とも関連し、とても困惑する。親切な説明をお願い申し上げます。

第三に、ある意味では、東山の神秀が主張する了心修道は、宗密が主張する頓悟漸修ととても似ているように見える。この点は、なくすべき染心も得るべき浄心もないという慧能の染浄不二の心性観とも異なって考えられる。そのため、「南頓北漸」と膾炙されるのではないか。評者のこのような考えは間違っているのか？ さらに言えば、慧能を中国禅宗の実質的な開祖と見る立場は間違っているのか？ 繰り返しになるが、論者は中国禅宗の開祖を東山法門と考えるのか？ 親切な説明をお願い申し上げます。

5. 評者が見るに、仏性は、ほかの言葉では、慧能の本来面目、神会の空寂靈知、宗密の知と表現することができる。このように見れば、論者の論文「禅宗の成立と仏性観の変容」において、彼らと、彼らの説く上に掲げた概念に対する論究がないという点がとても惜まれる。また、もし慧能と神会が論議の表舞台に立つならば、論文の展開が他の方向へ行くことも可能である。つまり、慧能—神会—馬祖という展開も可能であるということである。この点についてはどのように考えるのか？ 論者の卓見をお伺いしたい。

6. 最後に、論文全体において「推測される」「なかったであろう」「考えられるのである」「関係あるのであろう」などの表現があまりにも多い。すなわち、恣意的な見解を一方向的に提示する場合が多い。この点、論者が論証の（仏教）学ではなく、心証の（仏教）学を志向するのではないかという考えを抱かせる。評者の見方は間違っているのだろうか。

7. これまで、論者の論究に対していくつか疑問に思った点と、よく理解できなかった点を明記してみました。どんなに良く表現しても、評者が主題も知らず、生半かな知識で述べたではないかという思いを消すことができない。ご了承くださいるようお願いしたい。

評者が見るに、伊吹敦教授が扱っているこの主題はとてもすばらしく、研究を深めるに値するものだという思いがします。この論文もまた、近来、見るに稀なすばらし

い論文であるという気持ちがあります。論者のご健勝をお祈りします。

(翻訳担当：佐藤厚)